

「思い出せない」もの忘れ、記憶できない認知症

今月号から隔月の連載となりました。その分長文となりますが、どうぞお付き合いください。皆さんは「ついさっきのことが思い出せない」ということはありませんか？ 診察室を訪れる方の中には、高齢になるにしたがって認知症を心配される方が多くなります。そこで今月は、「もの忘れ」と「認知症」の違いをお話ししましょう。

診察室で「もの忘れが心配」という相談をなさる方がいます。「人の名前を思い出せない」「物をどこにしまったか思い出せない」など、もの忘れは年齢が上がるにつれてよく起こりがちです。

もの忘れは、その時情報の一部を思い出せないものの、後から思い出すことが出来、忘れてしまったことを自覚できます。その点で認知症とは違いがあります。認知症は、情報のすべてを忘れてしまい、つじつま合わせの作り話をしたり、忘れていたことすら分からないことが多いのです。

厚生労働省研究班の調査では、65歳以上の年齢になるとおよそ7人に1人が認知症になるといわれています。年齢別で見ると、74歳までは「10

人に1人以下」程度ですが、85歳以上では「5人に2人以上」になるとのことです。

診察室では、認知症かどうか簡単な心理検査をします。そこで認知症が疑われる場合、改めて原因を確認しなくてはなりません。実は

はうつ病や脳卒中、栄養障害など、ほかの病気が原因で認知症のような症状が表れている可能性があります。そのため血液検査をし、診療所できない頭のCTスキャン、もしくは



誰だか分からない、暴力的になることも

認知症は記憶することが難しくなる病気で、特に新しいことを記憶できなくなることも多いため、昔のことはよく覚えていて、さっき話したことは分からない、ということが起こります。

時間や場所、人に関する情

報も混乱するため、今日の日付けが分からない、町内で迷子になる、家族のことが分からない、などといったことが起こります。日行っていた調理や着替えなどが出来なくなったり、性格が変わったように感じることもあります。

自分で仕舞い込んだ物を盗まれたと思いついで警察を呼んだり、どこかへ出掛けようとして帰れなくなって行方不明になったり、すぐ怒ったり、興奮して暴力的になったり、不安やうつ状態になり閉じこもってしまうなど困った事態になるような場合もあります。

残念ながら、現在の医療で

はまだ治療する薬は開発されていません。しかし認知症の悪化を遅らせたり、困った症状に一時的に対処する薬は出てきています。

介護保険制度が始まって、認知症の方への対応に慣れた介護スタッフも増えてきており、認知症に対応した社会に向けての準備が整いつつあります。

町立診療所副所長

古川 倫也